

小 学 校

平成 2 3 年度

教育研究員研究報告書

図画工作

東京都教育委員会

目次

I	研究主題設定の理由	1
	1 新しい学習指導要領の改訂の趣旨	1
	2 創造性の育成と言語活動の充実	1
	3 図画工作の指導における現状	2
II	研究の視点	3
III	研究の仮説	3
IV	研究の方法	3
V	研究の内容	4
	1 アンケート調査	4
	2-A 「発想や構想の能力」の育成について	5
	(1) 研究副主題及び研究の視点 (2) 研究の仮説 (3) 研究の方法	
	(4) 研究の内容 (5) 研究の成果(作品や児童の活動の様子による検証)	
	(6) 研究の成果(児童アンケートによる検証) (7) 今後の課題	
	2-B 「創造的な技能」の育成について	10
	(1) 研究副主題及び研究の視点 (2) 研究の仮説 (3) 研究の方法	
	(4) 研究の内容 (5) 研究の成果 (6) 今後の課題	
	2-C 「鑑賞の能力」の育成について	15
	(1) 研究副主題及び研究の視点 (2) 研究の仮説 (3) 研究の方法	
	(4) 研究の内容 (5) 研究の成果と課題	
	2-D 「言語活動」の充実について	20
	(1) 研究副主題及び研究の視点 (2) 研究の仮説 (3) 研究の方法	
	(4) 研究の内容 (5) 研究の成果 (6) 今後の課題	

研究主題

児童の感じたことや考えたことを大切にした指導の工夫による豊かな学びの創造

I 研究主題設定の理由

1 新しい学習指導要領の改訂の趣旨

今年度4月から全面実施された新しい小学校学習指導要領は、知・徳・体のバランスのとれた力である「生きる力」の育成の一層の推進のために、これまでの学校現場等での課題を踏まえ、指導面などでの具体的な手だてを確立することを目指して改訂された。

図画工作では大きな改善点として、育成する資質や能力を整理し、表現や鑑賞の過程で働く力を明確にするとともに、それらが関連して働くように内容の改善が図られた。また、児童が自らの行為や感覚を基に形や色、イメージなどを活用して活動することができるように、領域や項目などを通して共通に働く資質や能力が〔共通事項〕として示された。

図画工作の学習活動の目的は、従来から作品の出来栄えなどの活動の成果にあるわけではなく、小学校学習指導要領の図画工作の目標や内容に示す、資質や能力の育成にあることは言うまでもない。

しかし、児童の作品を前にすると、その圧倒的な魅力からか、ともすると作品全体を印象的に捉え、児童の資質や能力の状況について見落としがちなのではないかという指摘や、手段としての題材が目的化して資質や能力の視点が抜け落ちてしまい、内容と方法ばかりに目が向いているのではないかといった指摘をよく耳にする。

今回の学習指導要領の改訂は、このような、いわゆる「作品主義」や「題材主義」ではなく、児童の資質や能力を育成するための図画工作科教育としての在り方を一層明確に示すものである。

児童の資質や能力の育成を図るとは、表現及び鑑賞の活動の過程で生き生きと働く児童の資質や能力を重視し、活動における児童の行為に着目して価値を見いだすということである。

元来、図画工作の学習活動は、自分としての意味あるものや価値あるものをつくり出す創造活動であることを特質としている。つまり、一律に正解を求めるような学習活動ではなく、児童が自分の感覚や考え方を頼りにして、形、色、テクスチャーなどを媒介とした質的な思考を推し進めながら、自分としての意味や価値を追求していく学習活動が展開される。

したがって、児童の資質や能力の育成を図る指導の充実のためには、児童がどのように感じ、何を考え、そして、どのようにしようとしているかなどの児童の姿を、常に確かめる視点をもつことが重要となる。

2 創造性の育成と言語活動の充実

昨今、急速なIT革命による社会・経済変革を経て、新たな社会・経済システムとしての「創造社会」が到来すると言われている。文化的、芸術的、経済的価値創造において、新しいアイデアやプロセスを生み出す力である「創造性」が中核的な役割を果たすというものである。

世界に目を向けてみると多くの国において、義務教育の中で芸術教育を明確に位置付けようとする動きが活発化している。ユネスコ芸術教育世界会議（2006年3月）では、アメリカ、イギリス、フランスなどの国々で、産業の活性化や国際競争力の維持のために、創造性育成の担い手としての芸術教育の充実を図ろうとしていることが報告された。

このような背景の中、中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）」（平成20年1月）において、図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）の改善の基本方針として、「創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること」「創造性を育む造形体験の充実を図りながら、形や色などによるコミュニケーションを通して、生活や社会と豊かにかかわる態度」を育むことが示された。

図画工作における表現及び鑑賞の活動は、児童の創造性を育むための学習活動である。そして、この図画工作で育む創造性を、分析的に示したものが四つの評価の観点に示された資質や能力であり、その育成を図るための造形体験の充実が求められているのである。

《図画工作の評価の観点及びその趣旨》

- 【造形への関心・意欲・態度】自分の思いをもち、進んで表現や鑑賞の活動に取り組み、つくりだす喜びを味わおうとする。
- 【発想や構想の能力】感じたことや材料などを基に表したいことを思い付いたり、形や色、用途などを考えたりしている。
- 【創造的な技能】感覚や経験を生かしながら、表したいことに合わせて材料や用具を使い、表し方を工夫している。
- 【鑑賞の能力】作品などの形や色などから、表現の面白さをとらえたり、よさや美しさを感じ取ったりしている。

《学習指導要領解説に示された図画工作の評価の観点の資質や能力の考え方》

- 【造形への関心・意欲・態度】形や色などに対する好奇心、材料や用具に対する関心やつくりだす活動に向かう意欲など
- 【発想や構想の能力】形や色、イメージなどを基に想像をふくらませたり、表したいことを考えたり、計画を立てたりするなどの能力
- 【創造的な技能】材料や用具を用いたり、表現方法をつくりだしたりするなど、自分の思いを具体的に表現する能力
- 【鑑賞の能力】作品をつくったり見たりするときに働いているよさや美しさなどを感じ取る能力

これらの資質や能力は、人が身の回りの環境と豊かに交流しながら、環境と自分自身をよりよく更新し続け、新しい意味や価値を創造し、心豊かな生活や人生をつくり上げていくために重要な資質や能力であると言えよう。図画工作における豊かな学びとは、正に、「生きる力」としてのこれらの資質や能力の伸長にほかならない。

一方、新しい学習指導要領で充実が求められている言語活動については、「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」（文部科学省、平成22年12月）に示されているように、表現においては、「発想や構想の能力」「創造的な技能」を高めるために、考えたことを伝え合う学習活動の充実が課題である。また、鑑賞においては、「鑑賞の能力」を高めるために、感じたことや思ったことを話したり、友人と語り合ったりする学習活動の充実が課題である。特に、図画工作における「思考・判断・表現」の資質や能力は「発想や構想の能力」「鑑賞の能力」で把握し育成することから、その発揮している場面を中心にして言語活動を充実させることが重要となる。

3 図画工作の指導における現状

図画工作の教科書は、従来から題材提案型である。図画工作の学習活動の単位となる題材は、活動の対象や内容、材料や用具、表現方法などを含み、指導内容を児童の実態に即した学習活動として展開させたものである。各学校の授業では、教科書を基にして様々な題材が展開されており、その設定については、教師の判断に任されている面が強いことから、判断の基準が不明確に

なりやすい。また、多くの若手教員にとっては題材設定が大きな課題となっており、例えば、他校の経験豊かな教員の題材をまねするだけとなるなど、目の前の児童に対して十分に目を向けていないような現状も見られる。加えて、児童の作品の出来栄をよくするために、指導のしやすさなどから、活動の過程を細かい段階に区切り、表現の仕方を一律にして取り組ませるような題材設定に陥ってしまうような事例も見られる。

II 研究の視点

以上のことから本研究は、児童の資質や能力を育成するための図画工作の指導の改善・充実を図ることを目的として、研究主題を「児童の感じたことや考えたことを大切にした指導の工夫による豊かな学びの創造」と設定し、以下の視点で研究を行った。

- 児童が感じ考えるということ、評価の観点の分析的な視点から明確にする。
- 評価の観点に示された資質や能力の育成を図るための、児童一人一人の感覚や感情、考え方を大切にした指導の在り方について具体的に示す研究とする。
- 言語活動については、「発想や構想の能力」「鑑賞の能力」を発揮している場面で、児童一人一人が自分なりの感じ方や考え方に基づいて活動を進められるようにするための手だてを具体的に示す研究とする。

III 研究の仮説

本研究では、児童の感じたことや考えたことを大切にした指導の在り方について、「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」の育成及び「言語活動」の充実の四つの研究内容ごとに、以下のとおり研究副主題を設定し仮説を立てて研究を行った。

- 「発想や構想の能力」を育成するための創造的思考力を高める指導の工夫
[研究の仮説] 児童の思考することへの意欲を高めたり、思考の仕方を工夫させたりすることを重視して指導の工夫・改善を行えば、児童の「創造的思考力」を高めることができるであろう。
- 「創造的な技能」を育成するための児童の試行錯誤を大切にした「造形遊び」の指導の工夫
[研究の仮説] 「造形遊び」において、児童が自分なりに材料の生かし方を考え、試行錯誤しながら表現を追求できるよう指導の工夫・改善を行えば、児童の創意工夫する力を育むことができるであろう。
- 「鑑賞の能力」を育成するための主体的に見る力を育み見方や感じ方を広げる指導の工夫
[研究の仮説] 児童が自分なりの視点をもてるよう指導の工夫・改善を行えば、主体的に見る力が育つであろう。また、自分や友達の見方や感じ方を交流し、共有できるよう指導の工夫・改善を行えば、見方を広げたり感じ方を深めたりできるであろう。
- 「言葉の力」を活用し児童の感じたことや考えたことを大切にした表現活動の工夫
[研究の仮説] 「言葉の力」を活用し、児童の感じたことや考えたことを大切にした表現活動の工夫を行えば、表現に関わる能力を効果的に育成できるであろう。

IV 研究の方法

- 「特定の課題に関する調査（図画工作・美術）」調査結果（国立教育政策研究所、平成23年3月）等、先行研究、関連資料の読み込みを行った。
- 東京都の図画工作専科教員を対象として独自のアンケート調査を行い、その結果を基に現状の分析を行った。
- 研究内容ごとに、研究副主題及び研究の仮説を立て、検証授業を行った。
- 検証授業で得られた成果と課題をまとめた。

V 研究の内容

1 アンケート調査

図画工作専科教員を対象として、以下の内容及び方法で調査を行った。

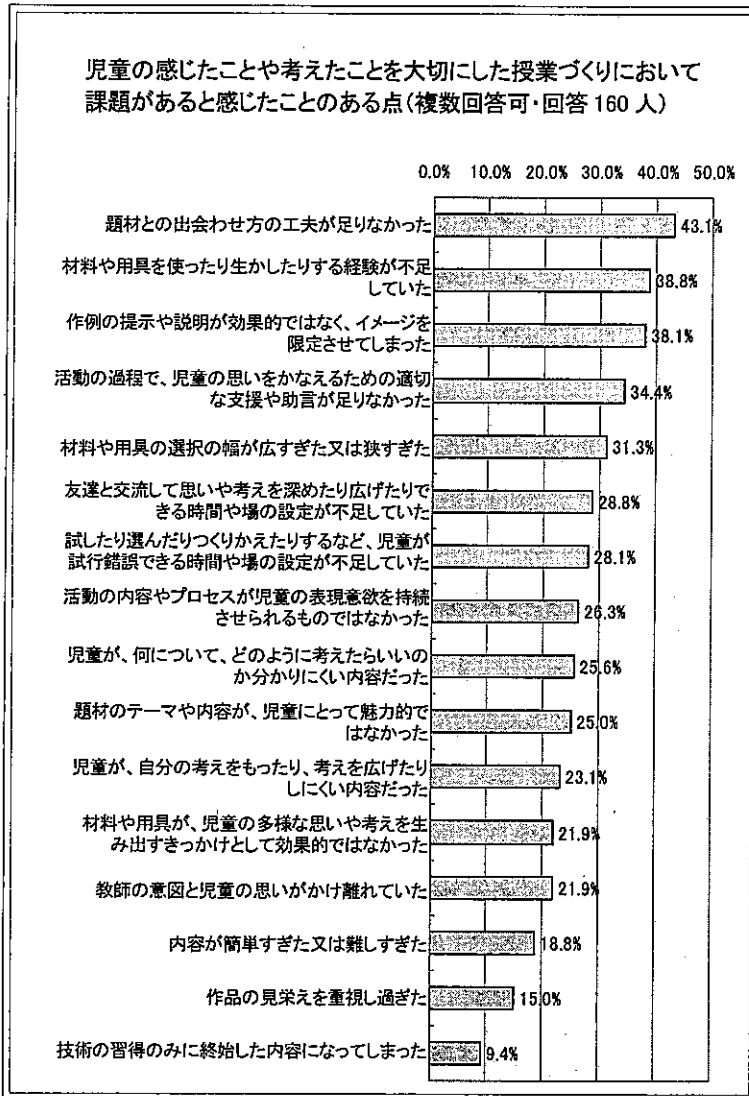
〔調査内容〕 ①児童の感じたことや考えたことを大切にしたい授業づくりについて

②言語活動の取組について ③鑑賞の活動について

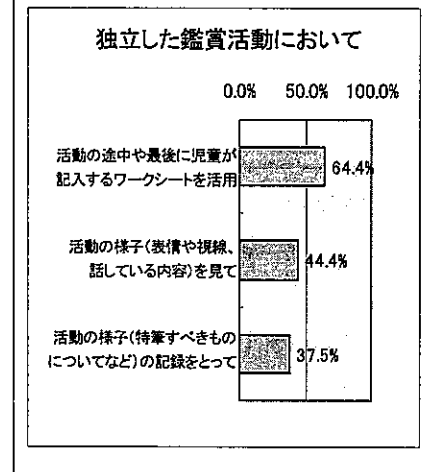
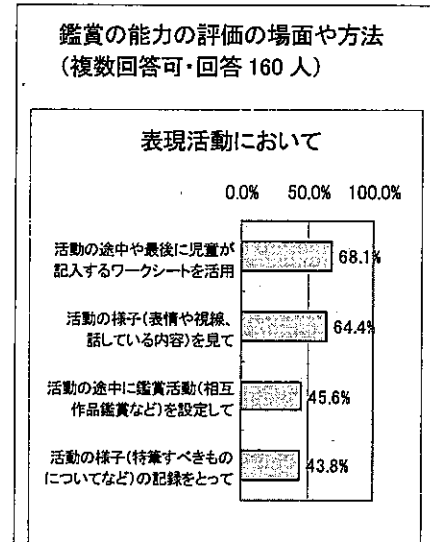
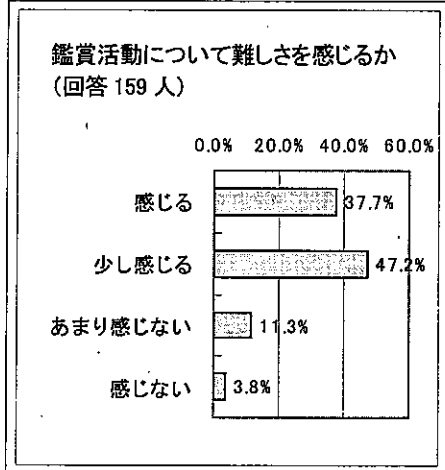
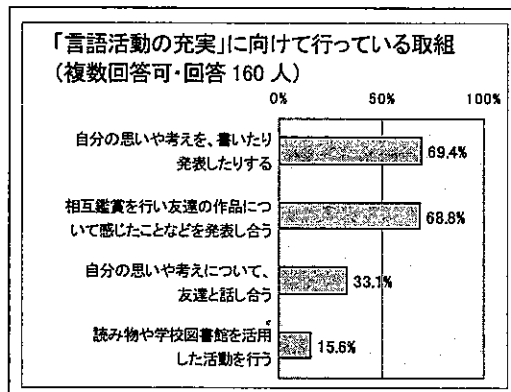
〔調査対象〕 都内の3区1市の小学校の図画工作専科教員

〔調査期間〕 平成23年9月1日から9月30日

【調査結果】※



※ 本アンケート調査の各調査結果の分析については、研究内容の2(A・B・C・D)で示す。



2-A 「発想や構想の能力」の育成について

研究副主題

「発想や構想の能力」を育成するための創造的思考力を高める指導の工夫

(1) 研究副主題及び研究の視点

本研究では、児童が豊かに発想する上で必要となる思考力を「創造的思考力」と呼ぶこととする。この「創造的思考力」とは、柔軟に考え、自分なりの考えを生み出したり、更にそれを広げたり深めたりする思考力のことである。本研究は、意味や価値を考え出す力である「発想や構想の能力」に焦点を当て、その育成を図るための、「創造的思考力」を高める指導の在り方について研究を行う。

児童の「創造的思考力」を高める指導を進めるに当たって最も重要となるのは、学習活動の中に、児童自らが進んで何かを感じたり考えたりしたくなるような魅力的な場面を設定することである。児童は表現活動において、自分の考えたことや自分の表したことから自分の存在を感じ、より自分らしくあろうとする。この欲求は、外からの力によって動かされる対応的なものとしてではなく、自分の中からの必然的な欲求としてこそ現れるものであると考える。

つまり、児童にいくら「自分らしく考えよう」と言っても、それだけでは、児童が自分なりの考えを生み出せるものではない。児童が、「活動させられている」という束縛感や強制感などをもたないで、自分らしさを発揮しながら自分なりの意味や価値を考え出したいと思えるよう、活動の対象や内容を工夫することが重要である。

一方、「図画工作専科教員へのアンケート調査」の結果を見ると、「児童の感じたことや考えたことを大切にしたい授業づくりにおいて課題があると感じたことのある点」についての回答の内、「題材との出会わせ方の工夫が足りなかった」(43.1%)、「作例の提示や説明が効果的ではなく、イメージを限定させてしまった」(38.1%)を選択した割合が高く、題材の導入時等における児童への題材や作例の提示の仕方に課題があると考えている教員が多いことが分かる。

また、「友達と交流して思いや考えを深めたり広げたりできる時間や場の設定が不足していた」は28.8%との結果であり、学習活動における学び合いの場の設定に課題があると考えている教員も比較的多いという結果となった。こうした調査結果を踏まえ、表現題材における導入時の題材の提示や活動の過程における学び合いに焦点を当て、「創造的思考力」を高め「発想や構想の能力」を育成するための具体的な指導の工夫・改善をねらいとして本研究を行う。

(2) 研究の仮説

児童の思考することへの意欲を高めたり、思考の仕方を工夫させたりすることを重視して指導の工夫・改善を行えば、児童の「創造的思考力」を高めることができるであろう。

(3) 研究の方法

○ 研究副主題に迫るための具体的な手だての設定

- ・ 導入時等の題材提示の工夫 … 「考えたくなるしかけ」題材にわくわくする思考要素を組み込むことで、「創造的思考」への意欲を高める。
- ・ 個別的・具体的な指導の工夫 … 「思考の方向の焦点化」解決策の具体的な提示ではなく、言葉かけにより「創造的思考」を促す。
- ・ 活動の過程における学び合い … 「楽しめる交流活動」意図的に友達思考と関わらせることで、個では気付かなかった考えへと導く。

- ・ 思考過程の可視化 … 「追記型ワークシート」考えを追記させていくことで、思考が整理・具体化され、次の思考を促すきっかけとなる。

- 検証授業前に、図工の授業全般について、児童へのアンケート調査を行う。
- 検証授業を行う。活動途中の作品を写真に記録し必要に応じて児童への聞き取り調査を行う。
- 検証授業後に、今回の授業に特化して、同内容のアンケート調査を行う。
- 児童の活動の過程に着目するとともに、アンケート調査結果を基にして検証を行う。

(4) 研究の内容

《検証授業》「夢がいっぱい つながる世界」(第3学年、A表現(2)・B鑑賞(1)、全6時間)

平成23年9月15日実施

○ 題材の目標

行ってみたい二つの世界を想像して豊かに発想し、自分の考えを基にして、つくりたいものに合った用具や材料を使いながら表すことを楽しむ。


○ 題材の内容

本題材は、互いに行き来できる二つの世界の様子を想像しながら表す活動である。

○ 題材の評価規準

	ア 造形への関心・意欲・態度	イ 発想や構想の能力	ウ 創造的な技能	エ 鑑賞の能力
題材の評価規準	自分の想像した世界をつくることに興味をもち、工夫して表す面白さを楽しもうとする。	①想像したことから、自分の表したい世界を考える。 ②友達の表現との交流をきっかけとして、新たな発想を加えるなどする。	つくりたいものに合わせ、用具の特徴や材料のよさを生かしながら、形や色を組み合わせ、工夫して表している。	自分や友達の作品のよさや面白さを感じ取っている。

○ 学習活動の展開と「創造的思考力」を高める手だて等

時間	学習活動	「創造的思考力」を高める手だて等	評価規準・方法
一次 90分	①ベニヤ板の表面を棒(バルサ材)で仕切り、 <u>二つの世界をつくる</u> 。 ②二つの世界を行き来する <u>自分の分身をつくる</u> 。 ③二つの世界の基調色を塗る。	<p>☆ <u>導入時等の題材提示の工夫</u></p> <p>「自分だったらどんな世界に行ってみたいかな？」児童がわくわくするような魅力のあるテーマとして、「行ってみたい世界」「二つの世界」「つながる世界」を設定する。</p> <p>行き来できる二つの世界とし、それらを自由に分割できる設定にして、それぞれの世界の意味付けや二つの世界の関係性を考えさせる。</p> <p>さらに自分と世界との関係性を強く意識させるために、自分の分身をつくり、つくった世界に自分を置く設定にする。</p> <p>☆ <u>個別的・具体的な指導の工夫</u></p> <p>思考の方向の焦点化を図る意図的な言葉かけ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何があるのかな？ ・何が住んでいるのかな？ ・どんな気分になるのかな？ ・二つの世界にはどんなつながりがあるのかな？ ・どうやって行き来できるのかな？ ・どんなひみつがあるのかな？ 	ア観察・対話 (特筆すべき状況は記録に残す。)
		<p>☆ <u>思考過程の可視化</u></p> <p>ワークシートに表したい世界のアイデアをメモさせることで、自分の思考を整理させる(記述の程度は個々にまかせる。)</p>	イ①観察・対話・ワークシート (特筆すべき状況は記録に残す。)

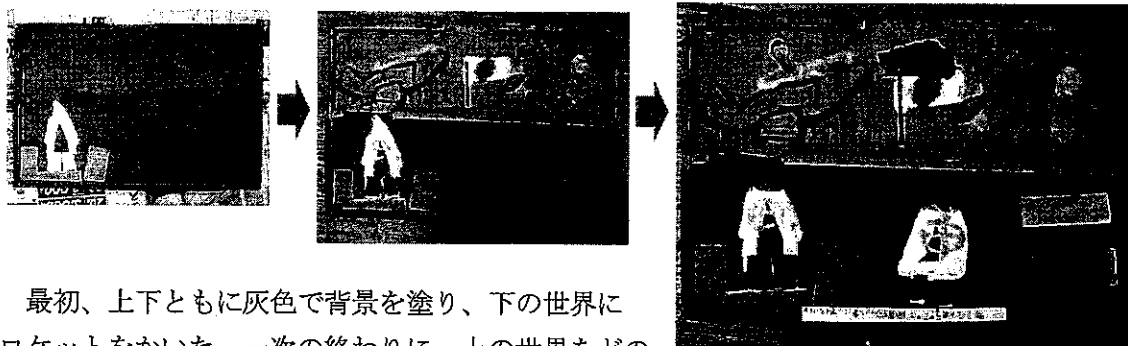
二次 90 分	④表したい世界をつくる。	○表現を広げることができるよう多様な材料や用具を提示する(アクリル絵の具、クレヨン、コンテ、マーカー、片面段ボール、スチロールパネルなど)。	ウ観察・対話 (特筆すべき状況は記録に残す。)
	⑤互いの作品をつなげて鑑賞する。	☆ <u>活動の過程における学び合い</u> 二つの世界の外側の入り口を通して友達のつくった世界にも行き来できるように作品をつなげ、自分の分身を様々な世界に冒険させて楽しみながら鑑賞させることで、新たな「創造的思考」を促す。	エ観察 (特筆すべき状況は記録に残す。) イ②観察・対話・ワークシート (特筆すべき状況は記録に残す。)
	⑥表したい世界をつくる。	○友達の表現との交流をきっかけとして、新たな発想を加えたり様々な表現方法を組み合わせたりする。 ☆ <u>思考過程の可視化</u> 思いついたアイデアをメモさせることで、自分の考えたことを整理させ、思考の広がりや深まりに気付かせたり、次にやりたいことの見通しをもたせたりする。	
三次 90 分	⑦表したい世界をつくる。	○自分が納得のいくよう表現を追求する。	ア・ウ観察・対話 (特筆すべき状況は記録に残す。)
	⑧全員の作品をつなげて鑑賞する。	○友達の作品のいろいろな表し方の違いを見付けたり、よさや面白さなどについて、感じたことを話し合ったりするなど、関心をもって見る。	エ観察・対話 (特筆すべき状況は記録に残す。)

(5) 研究の成果 (作品や児童の活動の様子による検証)

児童一人一人は、実に多様な二つの世界をつくり上げていたが、それを発想の視点でいくつかの類型化し、中でも特徴的なものについて検証することとする。

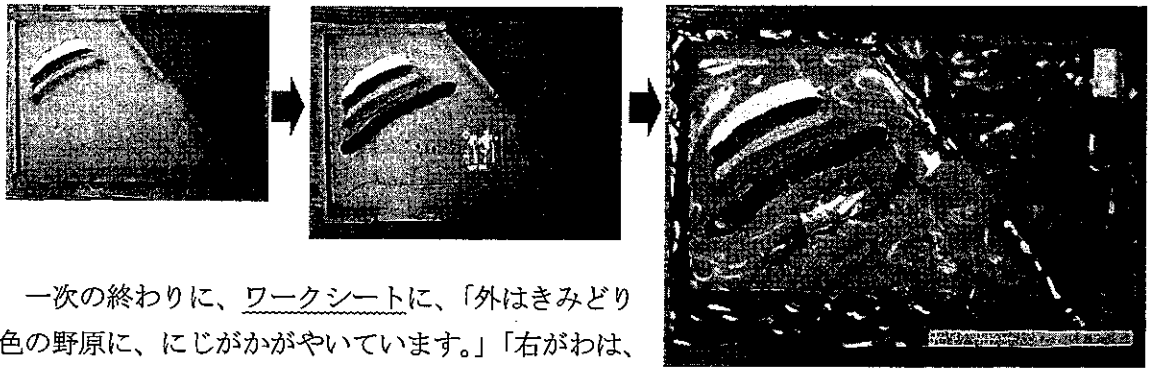
ア 位置の関係性から発想する

(7) 上下の関係性 (児童A「ロケット飛行場と月の遊園地」)



最初、上下ともに灰色で背景を塗り、下の世界にロケットをかいた。一次の終わりに、上の世界をどのようにつくろうかと考えているうちに、「月の世界」を思い付いたとワークシートに記述した。二次が始まった途端、上の世界を明るい色塗り替えた。「そこにはどんなものがあつたらいいか」と考える視点を投げかけたところ、遊園地があつたらいいな、さらにロケット飛行場にもロケットを運ぶ車があつた方がいいな、と新しい発想を考え出して付け加えた。その後、友達の作品を見て、「ワープする世界」というテーマに面白さを感じ、「ロケットで一気にも月まで行けるようにしよう」と、赤いワープホールをかいて仕上げた。

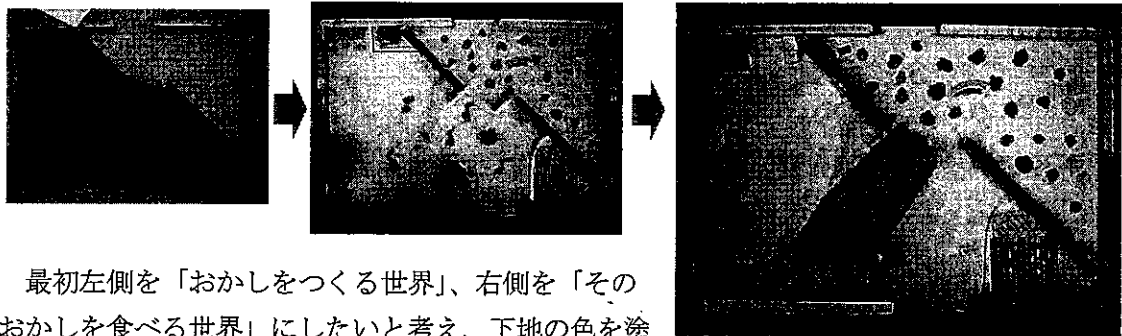
(イ) 内外の関係性 (児童B 「にじがかかっている世界とレストラン」)



一次の終わりに、ワークシートに、「外はきみどりの野原に、にじがかがやいています。」「右がわは、にじを見ておなかがすいた時のレストランにします。」と記述していた。右側のレストランは当初、灰色で塗っていたが、二次の途中で、もっと明るい雰囲気になりたいと思い、もも色に塗り替えてテーブルやイスをかいた。ところが交流活動の際に、海の世界をつくっている作品を見て自分も海にしたいと思い、野原を海の色に塗り替えた。そこで、「海の上に虹がかかっているなんてとてもすてきだね」と言葉をかけたところ、もっとイメージを膨らませたいという思いをより強めたようで、二次の終わりには「海の上を走る車をかきます」とワークシートに書き加えていた。そして三次では海の上を走る車をつくって海の上に貼った。

イ 意味の関係性から発想する

意味の対比の関係性 (児童C 「のんびり楽しくすごせる世界とたくさん遊べる世界」)



最初左側を「おかしをつくる世界」、右側を「そのおかしを食べる世界」にしたいと考え、下地の色を塗っていたが、すぐに違う考えが浮かび、一次の終わりに、ワークシートに、「みんなで仲よく遊べる世かい」「明るくてゆっくりすごせる世かい」と記述していた。その後は一貫して、活動的な世界で過ごした後、一休みできる世界に行くという気持ちの連鎖を軸にして、例えば遊べる世界には中央に花畑、角にプールなど様々なものを考え出してつくっていった。交流活動の際には、カラーチューブをトランポリンに見立てている作品を見て影響を受け、右側の世界に移動するときにピョンピョンはねながら行くことができる橋を思い付いてつくった。

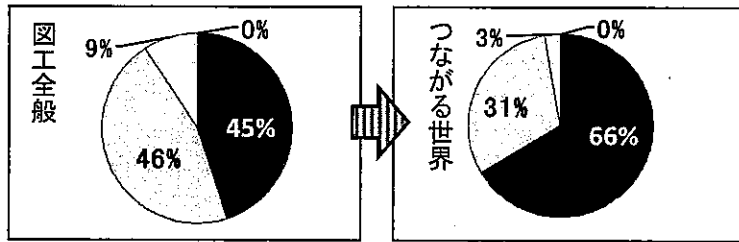
これらの児童の活動の様子から明らかなように、ワークシートの活用による「思考過程の可視化」は、自分の考えを書こうとしたときに、自分の考えの曖昧さに気付き、自分の考えを明確にするきっかけとすることができた。一方、明確な考えがある児童には、考えを深めたり広げたりするきっかけとなった。また、個別に支援するための資料ともなり、個に適した言葉かけを行うことができた。

交流活動による「活動の過程における学び合い」については、児童が、新たな発想を取り入れたり様々な表現方法を組み合わせたりするきっかけとして有効であった。交流活動に遊び感覚を取り入れたことで、楽しみながら相互鑑賞ができたことが、効果的であったと考える。

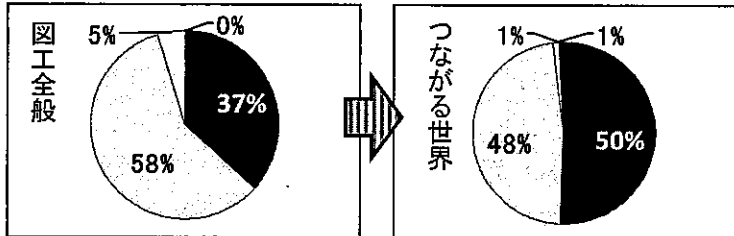
なお、上記の3人の児童は、当初の自分の発想を基に、友達との交流や教師の言葉かけなどをきっかけにして、新たな発想を加えながら発想を広げたり深めたりしたため、「発想や構想の能力」をAと評価した。

(6) 研究の成果 (児童アンケートによる検証) ■ よくある □ たまにある ▨ ほとんどない ■ まったくない

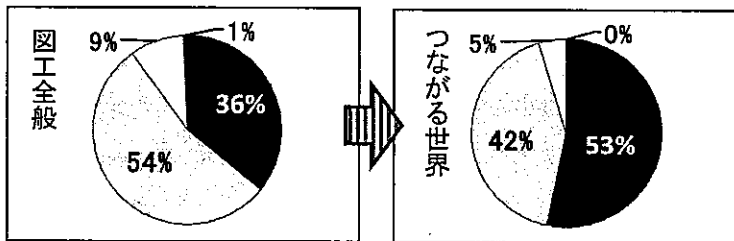
★1「時間をわすれてむちゅうになってかいたりつったりすることはありましたか。」



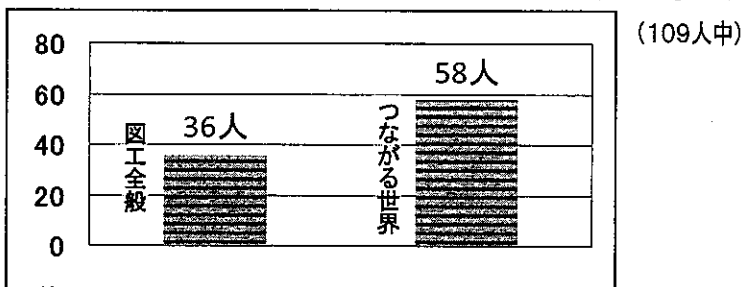
★2「自分だけのアイデアを思いつきましたか。」



★3「とちゅうで新しいアイデアを思いついたりアイデアをつけ加えたりしたことはありましたか。」



★4「★3の理由の一つに「友だちの様子を見たり、友だちと話したりできるから」を選んだ児童数



この題材の前に行った「図画工作の題材全般についての児童アンケート」と「本題材についての児童アンケート」の★1及び★2における調査結果の比較から、本題材は児童にとって、自己実現的な創造活動の喜びを実感しながら、「創造的思考力」を働かせる点で、極めて効果的であったと考える。

また、児童アンケート★3の調査結果の比較から、更に★4では、「友だちの様子を見たり、友だちと話したりできるから」を選択した児童が増加していることから、今回設定した交流活動による「活動の過程における学び合い」が、「創造的思考力」を高める点で、極めて効果的であったと考える。

(7) 今後の課題

図画工作の授業の活動内容を聞いただけで、「一刻も早くやってみたい」「いろいろなことが頭の中に浮かんできて考えるのが楽しくてしょうがない」といった児童の状況をつくり出すことができれば、児童は自然と、自ら感じたことや考えたことを生かし、「創造的思考力」を十分に発揮して活動を進めていくであろう。

また、児童一人一人は、実に多様な思考を巡らせ、試行錯誤しながら、自分のゴールに向かおうと活動を進めていく。その思考を左右する要因も様々で、ちょっとしたきっかけで思考の方向性が一変してしまうこともある。その中で、今回は特に「導入時等の題材提示の工夫」「個別的・具体的な指導の工夫」「活動の過程における学び合い」「思考過程の可視化」に注目して研究を進めたが、材料、環境、体験、学習経験等、他にも様々な要素が、「創造的思考力」を高めるための重要な要素となる。また、今回は特に取り上げなかったが、「創造的な技能」とも当然深く結び付いており、今後、一層研究を深めていくためには、別の視点からも考えていく必要がある。

2-B 「創造的な技能」の育成について

研究副主題

「創造的な技能」を育成するための児童の試行錯誤を大切にした「造形遊び」の指導の工夫

(1) 研究副主題及び研究の視点

「創造的な技能」は、図画工作の表現活動において、児童が、自分の発想したことを自分の思いや意図に従って表現として具象化する際に働く資質や能力である。

児童が、この「創造的な技能」を働かせている活動の様子からは、児童が自分の経験を生かしたり造形感覚を働かせたりしながら、自分の表し方を見付けたり表し方の効果を確かめたりする姿を見て取ることができる。

「創造的な技能」は、「新たな状況や対象に応じて思いを実現する力」（「基礎・基本と学習指導の工夫」、板良敷敏元文部科学省視学官）を意味している。それは、「創造的な技能」が単なる「技能」ではなく、「創造的」であるゆえんである。「狭い意味の基礎・基本（技術）は、使う機会がなくなると忘れられる運命にある。基礎・基本は、学習指導要領に示す目標・内容のことであり、それは、資質や能力を意味していることから、多様で弾力性のある機能的な性質をもつことに注意を払う必要がある。」（同、前掲書）というように、「創造的な技能」の育成を単なる技術の習得と勘違いしてはならない。例えば、児童が、用具を適切に扱うことができるようにすることが大切であることは言うまでもない。しかし、小刀や彫刻刀、金づちなどの用具を、ただ単に適切に扱えるようになることだけであったり、教師が提案した技法ができたかどうかだけであったりするるのであれば、それは「創造的な技能」とは言えない。

「新たな状況や対象に応じて思いを実現する力」としての「創造的な技能」の中核となるのは、自分の思いや考えに基づいて創意工夫する力である。この創意工夫する力を育成するためには、児童が試行錯誤を繰り返す中で、失敗を新たな発見として豊かに学び、さらに自分の表現を追求していく学習過程が不可欠である。そして、教師には、児童のそのような試行錯誤を見守り、児童の創意工夫を励ます指導の充実が求められる。

一方、図画工作専科教員を対象にしたアンケート調査の結果に目を移すと、選択した割合が25%以上で「創造的な技能」に関わる項目は次のとおりとなった。

- ① 材料や用具を使ったり生かしたりする経験が不足していた(38.8%)
- ② 活動の過程で、児童の思いをかなえるための適切な支援や助言が足りなかった(34.4%)
- ③ 材料や用具の選択の幅が広すぎた、又は狭すぎた(31.3%)
- ④ 試したり選んだりつくりかえたりするなど児童が試行錯誤できる時間や場の設定が不足していた(28.1%)

この結果から、題材を児童に提示し表現活動に取り組みせてみたものの、思うように児童の活動が進まなかったり広がらなかったりしたことから、材料や用具に関わる経験の不足や、材料や用具の示し方が適切ではなかったことを、教師が気付かされることが多いことが分かる。

また、児童が試行錯誤できる時間が不足していたため、児童の表現に自分らしさがあまり発揮されなかったり、表現方法が一律になってしまったりという題材設定上の課題や、発想を具象化するための手だてに行き詰まっている児童に対して、もっと個別指導を充実させたいという、教師の反省と願いを読み取ることができる。

これらのことから本研究では次の点に着目して研究を行うこととして、研究副主題を設定した。

〔本研究の視点〕 児童の「創造的な技能」を育成するための造形遊びの充実

- 多様な材料や用具を使ったり生かしたりする体験の重視
(題材における、適切な材料・用具の提示)
- 試行錯誤できる場面や時間の確保
- 児童を励まし支援するための多様な評価方法の工夫

児童の多様な試行錯誤が可能な題材の設定

〔造形遊び〕の重要性

材料や用具の性質や特徴及びそれらの効果などについて、児童が感じ考えることを繰り返しながら実験的に試すことを通して実感的に理解し、新しい活用方法を見付けたり自分なりの工夫の仕方を生み出したりできるようにするためには、“遊び性”を生かした造形活動である「造形遊び」が重要な役割を果たす。

研究副主題

〔創造的な技能〕を育成するための児童の試行錯誤を大切にした「造形遊び」の指導の工夫

(2) 研究の仮説

「造形遊び」において、児童が自分なりに材料の生かし方を考え、試行錯誤しながら表現を追求できるよう指導の工夫・改善を行えば、児童の創意工夫する力を育むことができるであろう。

(3) 研究の方法

- 研究主題に迫るための具体的な手だての設定
 - ① 「適切な材料・用具の提示と材料や用具を使ったり生かしたりする体験の重視」
 - ② 「試行錯誤できる場面や時間の確保」
 - ③ 「児童を励まし支援するための多様な評価方法の工夫」
- 検証授業を行う題材の検討
- 検証授業の実施（活動の様子を写真に記録し必要に応じて児童への聞き取り調査を行う。）
- 児童の活動の過程に着目した検証

(4) 研究の内容

《検証授業》「光ワールド」（第4学年、A表現(1)・B鑑賞(1)、全4時間）

平成23年11月8日実施

- 題材の目標
光の美しさや変化に気付き、光を使って創意工夫しながら、光と材料を組み合わせた表現を楽しむ。
- 題材の内容
本題材は、造形遊びとして光を使った様々な表現を行う活動である。
- 研究副主題に迫るための具体的な手だて
 - ① 「適切な材料・用具の提示と材料や用具を使ったり生かしたりする体験の重視」
材料が、児童の感覚や感性を刺激し創造活動への意欲やイメージを膨らませるものとなるよう、児童にとって適切で価値あるものかどうかを十分に検討した。材料は単に多ければよいと

いうものではないが、本題材においては材料の多様性が重要と考えた。それは、児童が、多様な材料を実験的に試すことを通して、光の性質（透過、反射、投影）や材料の性質を生かした様々な表現方法を実感的に理解し、新しい活用方法を見付けたり自分なりに創意工夫したりできるからである。具体的には透過性の高い素材や半透明の素材、反射する素材を集め、光と多様な関わりができるようにした。また、やや暗い中での活動に留意して、はさみなどで簡単に切ることができる物やセロハンテープですぐに接着できる物などを集めた。また、材料置き場を教室の中央にセットし、児童が思い思いに材料を手にとって選べるようにした。

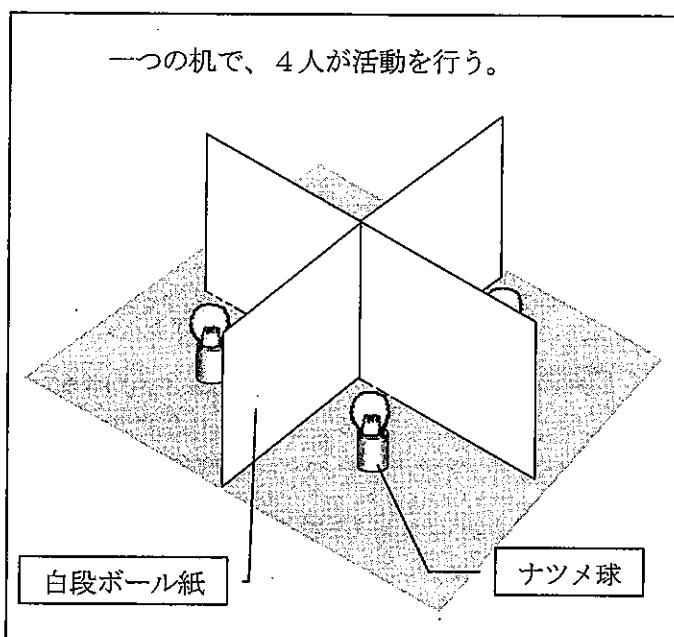
(用意した材料：ピン、ペットボトル、プラスチックケース、プラスチックカプセル、プリンカップ、CDケース、いちごパック、ラップ、色セロハン、スズランテープ、ピンポン球、ミラーシート、紙コップ、和紙、ゼラチン紙、ビー玉、おはじき、金網、スポンジ、発泡スチロールなど)

(用意した用具：はさみ、のり、セロハンテープ)

② 「試行錯誤できる場面や時間の確保」

日常の明るさとは異なる光の魅力を十分に感じられるよう教室内の照明を暗くし、多様な光の表現が効果的に確認できるよう机を白段ボール紙のパーテーションで区切り、児童一人一人の創意工夫がより鮮明に見えるようにした。

このような、児童一人一人専用の空間を確保することにより、自分の表現を追求しやすくなり、また、他の児童の空間と接していることから、お互いの学び合いにも効果的であると考えた。時間は2週間にわたって2時間ずつ2回行い、1回目の経験を2回目に生かせるようにした



③ 「児童を励まし支援するための多様な評価方法の工夫」

活動の様子を写真で記録することや、児童がワークシートにアイデアなどを書く活動を取り入れ、個に応じた指導に生かした。

なお、ワークシートは、児童の机の上に置くようにして、教師が確認できるようにした。

○ 題材の評価規準

	ア 造形への関心・意欲・態度	イ 発想や構想の能力	ウ 創造的な技能	エ 鑑賞の能力
題材の評価規準	光の性質や光と材料の組合せを生かして表す造形活動に興味・関心をもち、すすんで取り組んでいる。	表したい光のイメージを広げながら材料を選び、光の効果(発光、透過、投影や色合いなど)を考えて、造形的な活動を思い付いている。	自分の考えた造形的な活動を基に、材料の特徴を生かして形や色を工夫して表している。	光を使った活動を見合い、材料の使い方や色合いなど互いの活動のよさを感じ取っている。

○ 学習活動の展開と「創造的な技能」を高める手だて等

時間	学習活動	「創造的な技能」を高める手だて等	評価規準・方法
一次 90分	<p>①光の効果に興味をもち、光源と材料を組み合わせて、光の表現を試して楽しむ。</p> <p>②相互鑑賞活動を行いワークシートに記入する。</p> <p>③友達の工夫について気付いたことを発表する。</p> <p>④友達の表現の工夫を取り入れるなどして、光の表現を試して楽しむ。</p>	<p>○導入時等の題材提示の工夫 まず、教室を少し暗くして、ナツメ球を点灯させ、活動の進め方を理解させるために、色セロハンを使って活動の例示を行う。 [注意事項の指示] ・ナツメ球は熱くなるので、手や材料が直接触れないようにする。 ・教室を少し暗くして作業を行うので、材料を取りに行く際は注意する。はさみを持ったまま歩いたり、歩きながら切ったりしない。</p> <p>○活動の途中の言葉かけ等 ・光源の置き方や影に着目させるなど、透過だけでなく反射や投影の視点からも光の表現のよさを捉えるようにする。 ・教室内の電灯を点けたり消したりしながら、互いの創意工夫を見えやすくする。</p> <p>○光の感じや変化、材料の使い方に児童が着目できるワークシートを準備する。 自分の表現と友達の表現の、光と材料の組合せから感じたことを記入し、次時の活動に生かせるようにする。</p>	<p>ア観察・対話 (特筆すべき状況は記録に残す。) イ・ウ観察・写真 ワークシート (特筆すべき状況は記録に残す。)</p> <p>エ観察・ワークシート (特筆すべき状況は記録に残す。)</p>
二次 90分	<p>一次の経験を生かして、一次と同様の活動を行い、最後に自分の活動の写真を自分で撮り、作品を全員で見て回る。</p>		

(5) 研究の成果

題材の全体を通して、全ての児童において、意欲的につくり、つくりかえ、つくり続ける姿が見られた。児童にとっては、とても魅力的な題材であったと考えられる。

児童の表現については、事前の予想をはるかに超えて広がり、多様な表現が行われた。日常では表現活動の材料としては用いないような素材を材料として活用し、児童自らが表現方法を生み出していく際に働く能力は正に創意工夫する力であることから、本題材は、児童の創意工夫する力を十分に働かせる題材であり、材料の選定も的確であったと判断する。

また、創意工夫する力は、児童の形や色についての造形感覚と深く結び付いている。





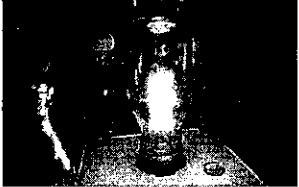

本題材で児童は、感覚や感性を思い切り働かせながら、造形的な操作による効果の変化を確かめ、思考力を働かせて試行錯誤しながらつくり続け、自分なりの表現を獲得していった。

創意工夫する力を高めるためには、この題材のように、児童が感覚や感性、思考力を十全に発揮しながら試行錯誤して取り組むことを重視した活動の設定が極めて重要である。

具体的な事例(次ページ参照)として、児童Aを取り上げる。児童Aは一次においては、光に色をつけたり形の影を写したりする試みをしていた。二次では暖かみのある人の形として表すために材料を選んでいった。児童Aは普段、どちらかといえば、授業中に周囲の活動を見て表し方のまねをする場面が多い。しかし、今回の造形遊びでは積極的に自分自身の表し方を見付けようとしていた。そして、思い通りにできたことを、自信をもって周囲の友達に話していたことが印象的であった。また、児童の活動の様子を写真で記録に残すことや、ワークシートの活用により、児童の活動のプロセスを多面的に捉えることに努め、児童が感じたことや考えたこと及び表現方

法の変化を具体的に把握することができた(下の表を参照)。ワークシートの一次①の記述からは材料の選び方や使い方の工夫を、②の記述からは友達の工夫のよさをどのように感じ取っていたかを把握できた。そして、二次の③では児童がどのように工夫したいのかという点に着目し、児童への助言にも役立てることができた。そして④では、活動を通した児童の学びの総括が行われていた。

《評価の事例》 児童Bは、一次で様々な表現を試し続けながら光の表現の多様さに気付き、他の児童の活動をつぶさに見て回っていた。⇒既にもっている知識や技能を生かしながら、また、他の児童の工夫を参考としながら、様々な材料で自分らしい方法を試し続けた(関連的・継続的)。そして二次ではミラーの反射を生かすためにナツメ球を囲むようにミラーシートで箱をつくり、中に透過や投影も生かしながら材料を詰め、四方八方に映り込む世界をつくり出していた。そして窓を開け、そこから箱の中の様子をカメラで写し「ま王の宮でん」と名付けていた。⇒一次の経験を生かしながら、自分の思いを基に、自分が納得いくように、対象に働きかけたり、働きかけを受けたりしながらも力を十分に働かせて表し方の工夫を続けた(主体的・継続的)。したがって、児童Bの「創造的な技能」の評価については、「十分満足できると判断されるもの」(A)と判断した。

ワークシートの項目	児童A	児童B	児童C
①わたしの工夫のすごいところを教えてください！	わたしは花や葉を全たいにつけていろいろな色をかげにしてうつつところ。	かさねてシートをかぶせたことです。プタのふたをとると、もみじとビーダマがあります。	きれいに2色にした事。あみをつけた事。
②友達の工夫のすごいところを見付けよう！	Rさんのが、すごく秋らしくてよかったですと思いました。	Kさんのミラーの光がすごいなーと思いました。中をのぞいたらすごく光っていたのでびっくりしました。	ミラーでかこむととてもきれいですごいと思いました。また花を使うときれいに見えいいと思いました。
一次作品			
③前回の“光遊び”を振り返りながら「今日は、どんな工夫をしてみたいですか？」	今日は、人間みたいに目をつけたりして、ちゃんと人間に、にているようにしたいです。	ミラーとミラーを光らせて、すごいきれいな工作を作りたい。	かべにかけをうつつしたい。あいろいろな色できれいにうつつしたいです。かっこいい、どのような感じにしたい。
④どんな“光の世界”ができましたか？	自分が、最初かんがえていたことといっしょですごくかわいくなりました。	ぼくのはミラーを赤くしたり、つけなかったり、ま王の宮でんみたいな感じの力作です。でもこれはいろんな人の工作を見たからです。	とてもきれいで神び的な世界が出来、大まんぞくです。Kくんの色を変えるのもいいと思いました。
二次作品			

(6) 今後の課題

今後の課題を次のように整理し、児童の創意工夫が十分生かされるような環境づくりと活動のプロセスを工夫していくことに努めていきたい。

- ①題材設定の工夫……児童が感じ考えながら、自分の表し方を見付けていけるような材料体験を意図的に計画的に取り入れていく。
- ②材料の選定の工夫…児童の工夫が次々に広がる上で効果的な材料の選定を行う。
- ③他者との関わりを生かす工夫…作品をいろいろな方向から見たり、いろいろな工夫を比較したりするなどして、そこから気づき得たことを自分の表現に生かしていけるようにする。
- ④ワークシートの工夫…児童が考えを整理したり発展させたりする上で有効であるもの。表し方や材料・用具の生かし方などを焦点化したもの。
- ⑤活動の振り返りの工夫…その後の造形活動により一層の工夫を試みることにつながるよう働きかけること。

2-C 「鑑賞の能力」の育成について

研究副主題

「鑑賞の能力」を育成するための主体的に見る力を育み見方や感じ方を広げる指導の工夫

(1) 研究副主題及び研究の視点

平成20年1月の中央教育審議会答申において、図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）の改善の基本方針として、「よさや美しさを鑑賞する喜びを味わうようにするとともに、感じ取る力や思考する力を一層豊かに育てるために、自分の思いを語り合ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりするなど、鑑賞の指導を重視する。」と示されている。これを受けて、新学習指導要領では、「A表現」及び「B鑑賞」の目標及び内容の改善を図り、育てたい資質や能力に合わせて指導事項を明確に示しており、特に鑑賞指導においては、より一層充実させていくことを求められている。

しかし、平成21・22年度に実施された「特定の課題に関する調査」（国立教育政策研究所）によれば、「図画工作の学習が好きだ」と答えた児童が全体の約83%であるのに対して、「友達の作品や美術作品を見て、感じたことや思ったことを話したり書いたりすることが好きだ」と答えた児童は約49%であった。このことから、児童が鑑賞活動よりも表現活動の方を好んでおり、鑑賞することへの関心や意欲が低い傾向にあることが分かる。

また、図画工作専科教員へのアンケート調査の結果では、「鑑賞活動について難しさを感じるか」との問いに対して、約85%の教員が「感じている」「少し感じている」と回答している。また、「言語活動の充実に向けて行っている取組」については、「自分の思いや考えについて、友達と話し合う」については33.1%と低い回答率となった。

このような状況を改善するためには、鑑賞活動の際に児童一人一人が感じていることや考えていることを明らかにすることが大切である。さらに、そのとき児童が発揮している鑑賞の能力を適切に把握しながら指導の工夫・改善を重ね、鑑賞の楽しさの実感や意欲を高める必要があると考える。図画工作の目標にも示されているとおり、鑑賞の活動も表現の活動と同様に、児童が形や色を通して意味やよさや美しさなどの価値をつくり出す創造活動である。したがって、児童の感じ方や考え方を大切にして、児童が自己実現的な喜びを実感しながら、活動の対象となる作品等に能動的に関わっていく学習活動を成立させることが重要となる。

以上のことから本研究では、鑑賞活動を通して児童一人一人に、作品等に能動的に関わり主体的に見る力を育てること、そして、見方や感じ方を広げることの楽しさを実感させることの二つを柱とした授業改善を行うことで、研究主題である「児童の感じたことや考えたことを大切にされた指導の工夫による豊かな学びの創造」に迫ることができると考え、本副主題を設定した。

(2) 研究の仮説

児童が自分なりの視点をもてるよう指導の工夫・改善を行えば、主体的に見る力が育つであろう。また、自分や友達の見方や感じ方を交流し、共有できるよう指導の工夫・改善を行えば、見方を広げたり感じ方を深めたりできるであろう。

(3) 研究の方法

- 検証授業を行い、児童の活動の様子やワークシートの内容を分析し、手だての有効性を考察・検証する。
- 活動の事前・事後に児童の意識調査を行い、その結果から変容を分析する。

(4) 研究の内容

《検証授業》「感じてつくるものがたり」(第6学年、B鑑賞(1)、全1時間)

平成23年10月14日実施

○ 題材の目標

美術作品を見て感じたことや考えたことなどからイメージを膨らませて自分なりの物語を作り、友達と交流することを通して自分や友達の見方や感じ方のよさや面白さに気付く。

○ 題材の内容

本題材は、教師が用意した美術作品をじっくりと鑑賞し、自由に物語を創作し友達と紹介し合うことを通して、それぞれが作品について感じたことや考えたことなどを知る活動である。

○ 題材の評価規準

	ア 造形への関心・意欲・態度	エ 鑑賞の能力
題材の評価規準	美術作品のよさや美しさについて、自分なりにイメージしながら味わおうとしている。	自分が感じたことやイメージしたことを、文章で表したり、話し伝え合ったりすることを通して、自分なりの視点を持ち、作品の特徴を捉えている。

○ 研究主題に迫るための具体的な手だて

① 主体的に見る力を育てるための指導の工夫

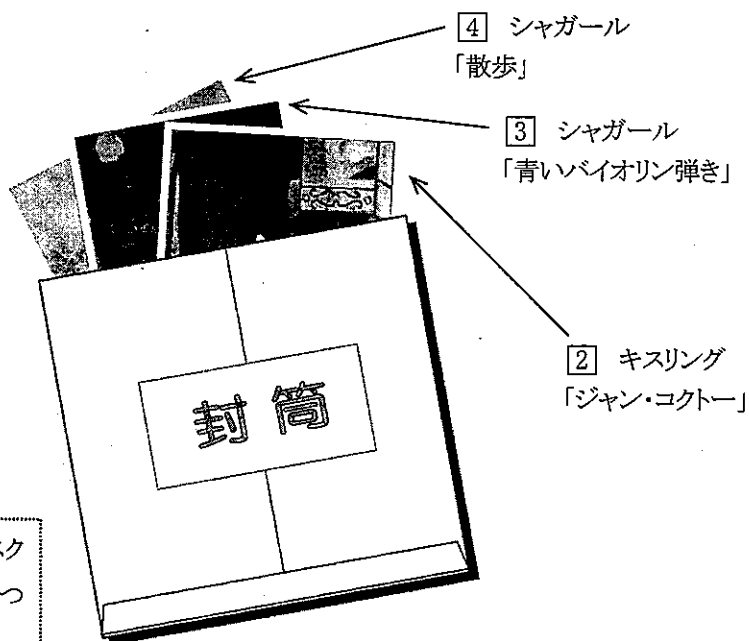
①-ア 児童にとって魅力的な作品を提示する。

本題材では、印象的な全体の色調、表現主義的要素、物語性、主題として人物が描かれていて自分自身を絵の中に投影させて考えやすいもの等の視点から、次の4作品を選定した。



① ルソー
「眠れるジプシー女」

①については、プロジェクターでスクリーンに大きく映し、② ③ ④については、封筒に入れて配布した。



①-イ 作品の中に描かれた形や色に注目させる

ただやみくもに作品を鑑賞させるのではなく、児童一人一人に明確な視点をもたせることで、作品を見たときに自分なりのイメージが広がりやすくなるのではないかと考えた。また、その際に具体物で視点を限定させることなく、形や色という質的な視点を示すようにした。

①ーウ 感じたことや考えたことから物語を創作させる。

物語として表す活動を取り入れることで、児童がより意識して見たり感じたりするなど、能動的に作品に関わることができるようになるのではないかと考えた。

①ーエ 個に応じた指導を充実させる。

本時の活動内容は、児童それぞれがもつ言語能力に頼る部分が多く、ともすると鑑賞の能力と言語能力の評価を混同してしまいかねない。

そこで、活動中の様子を丁寧に把握しながら一人一人に適切な言葉かけをしたり、文章で表すことが苦手な児童に対しては個別に支援したりすることが、鑑賞への意欲を高めることにつながるのではないかと考えた。

② 見方や感じ方を広げるための指導の工夫

② 児童一人一人の感じたことや考えたこと、イメージなどを共有するために、交流活動を取り入れる。

創作した物語を読み合うことで、自分以外の見方や感じ方に触れ、見方や感じ方を広げることの楽しさを実感しながら鑑賞の能力が更に高まるのではないかと考えた。

○ 学習の展開と「鑑賞の能力」を高める手だて等

時間	学習活動	「鑑賞の能力」を高める手だて等	評価規準・方法
20分	<p>①全員でプロジェクターでスクリーンに映し出された一枚の絵を鑑賞する。</p> <p>② ①の絵を見ながら、物語をつくる。 《絵の中に描かれている形や色に注目しながら想像し、簡単な文章で表す。》</p>	<p>○絵の中に描かれた形や色などの造形的な特徴に注目して見るように促す。</p> <p>○板書をする。</p> <p>絵の中の形や色に注目して見よう</p> <p>○絵を見て感じたことを基にして、イメージを膨らませて物語を書くように促す。</p> <p>手だて①ーウ</p>	<p>ア・エ観察・対話 ワークシート (特筆すべき状況は記録に残す。)</p> <p>手だて①ーイ</p>
20分	<p>③つくった物語を発表する。 《友達のつくった物語の発表を聞く。》 《発表者は絵の中の形や色を指し示しながら説明する。》</p> <p>④ ②～④の絵の中から気に入った作品を一つ選んで物語をつくる。</p> <p>⑤同じ絵を選んだグループに分かれ、物語を読み合う。</p>	<p>○友達がどんな形や色に注目して書いたのかを想像しながら聞くように促す。</p> <p>○発表した文章が、どの形や色に注目して書いたものなのか、発表者に質問する。</p> <p>○注目した形や色が同じでも、違う物語になった人に発表させる。</p> <p>○A4版のカラーコピーを配布する。</p> <p>○再度形や色に注目して見ることを促す。</p> <p>手だて①ーイ</p> <p>手だて①ーウ</p> <p>○絵を見ながら、友達の作った物語を聞くように促す。</p>	<p>手だて②</p>
5分	<p>⑥3枚の絵から生まれた物語を見て回る。</p> <p>⑦振り返りカードに記入する。</p>	<p>○パネルを3枚用意しておく。</p> <p>○パネルに物語を貼るよう指示する。</p> <p>手だて②</p>	

(5) 研究の成果と課題

○ ①主体的に見る力を育てるための指導の工夫 ①ーア・イについて

多くの児童は、作品をよく見つめて感じ取り考えながら、描かれた人物の気持ちに具体的に触れて物語を書いていた。このことから、作品の選定は適切であったと考える。また、鑑賞する際に形や色という質的なものに注目させることは、多くの児童が形や色で表された作品全体の雰囲気を感じ取り、自分なりの視点で人物の表情から感情を読み取るなどして考えていたことから、主体的に見ることに有効であったと考えられる。

○ ①主体的に見る力を育てるための指導の工夫 ①ーウについて

児童は作品の中の形や色を手がかりにして、作品全体の雰囲気や受ける感じなども踏まえ、様々な要素から総合的に判断し、イメージを膨らませて物語をつくっていたことから、手だてが有効であったと考えられる。一方で、文章を書くことを得意とする児童にとっては、作品はきっかけにこそはなったものの、物語の内容が作品と関わることなく広がってしまう活動になってしまったため、更なる指導の改善が必要であると考えられる。

○ ①主体的に見る力を育てるための指導の工夫 ①ーエについて

ほとんどの児童は、感じたことを文章で表すことができたが、文章を書くことに対して強い苦手意識を感じている児童は、「思っても書けない」「どう書けばよいのか分からない」となかなか活動に入っていくことができなかった。しかし、個別に聞き取りを行い、口頭でのやりとりを続ける中で、自分の言葉で感じたことを表すことができた（特筆すべき児童の活動の様子と評価については、以下の表を参照）。

（特筆すべき状況の児童の活動の様子と評価）

	児童A	造形への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
1 の絵を見ながら、 つくる活動について 物語を	活動中の様子 (表情や視線・話している内容等)とワークシートの分析	「ライオンのしっぽが立っている」「女の人が棒のようなものを握っている」と、指で指し示しながら隣の席の子に話しかけていた。	〈ワークシートの記述より〉「ライオンは、女の人がかかなでる楽器の音色につられてやってきた。女の方は旅人で、ツボの中には後ろの川でくんだ水が入っている。歩きつかれてつえを持っている女の人のおかげで、ライオンは優しい目で見守られて立たせながら神経を使って、周りの敵から女の人を守っている。」
	Aと判断した理由	具体物を指し示したり、友達に積極的に自分の感じたことを伝えたりする様子からAと判断した。	女の人とライオンという二つの要素の関係性を生み出したきっかけについて、「楽器の音色につられてやってきた」という自分なりに意味を考え出した。「歩きつかれた」女の人、「女の人を守っている」ライオンというように、関連的でありながら諸要素を総合的に判断して意味を考え出しておりAと判断した。

※ アンリ・ルソーは、自らが描いた「眠れるジブシー女」について、「マンドリンを奏で放浪するジブシーが、水差しを傍らに、疲れ果て深く眠っている。その時、一匹のライオンが通りかかり彼女を見つけ匂いを嗅ぐが、決して喰いつくわけではない。それは非常に詩的な月の光のせいなのだ。」と述べている。この児童は、事前にルソーやこの絵についての知識をもっていたわけではない。初めて接したこの作品に、瑞々しい感覚や感性、そして想像力を思い切り働かせて深く関わり、ルソーの思いや考えを読み取っている。なお、この学習活動は、正解を求める学習活動とはしなかったため、ルソーの意図については説明しなかった。

	児童B	鑑賞の能力
	活動中の様子 (表情や視線・話している内容等)とワークシートの分析	〈①の絵については白紙〉 〈②についての記述〉「男は、かんがえごとをしている。昔なにかがあって、それを思い出している。そうしたら、夕方になった。」
	Cと判断した上で最終的にはBと判断した理由	個別に声をかけても、手を止めたままぼんやりと外を眺めていたので、1枚目の絵の鑑賞が終わった時点でCと判断した。2枚目の絵を見ているときに、「どうしてこの色なのだろう」「この人は何をしているのか考えてみよう」等、絵の中に描かれた形や色に注目するよう促したところ、短い文章で感じたことを表現することができたためBと判断した。

○ ②見方や感じ方を広げるための指導の工夫について

児童の多くは、友達が書いた文章を聞きながら、同じものに注目して書いても全く違う物語

になっていたことに驚いたり、楽しんだりする姿が見られたことから、交流活動が有効であったと考えられる。今後さらに関わり合う活動を継続してもつことで、見方や感じ方の広がりやそれぞれが実感できるようにし、児童一人一人の鑑賞の能力を高めていきたい。また、今回の授業のように言葉を介した鑑賞活動は、一度や二度の活動だけで鑑賞の能力が高められるわけではなく、表現活動の中でも適宜取り上げながら、鑑賞指導を充実させていくことで徐々に高まっていくものだと考える。そのための継続的な活動を、年間指導計画に適切に位置付けていくことが必要である。

○ 児童の意識調査の結果から

活動の事前・事後に、次の意識調査を行った。

問① 普段の生活や図工の授業で、美術作品などを見るのが楽しいと感じますか(感じましたか)。
 問② 図工の授業で、美術作品などを見ながら、自分が感じたことや考えたことを書いたり話したりすることは楽しいと感じますか(感じましたか)。
 問③ 図工の授業で、美術作品などを見ながら、友達の感じたことや考えたことを聞いて、自分の見方が広がったり変わったりすることはありますか(ありましたか)。

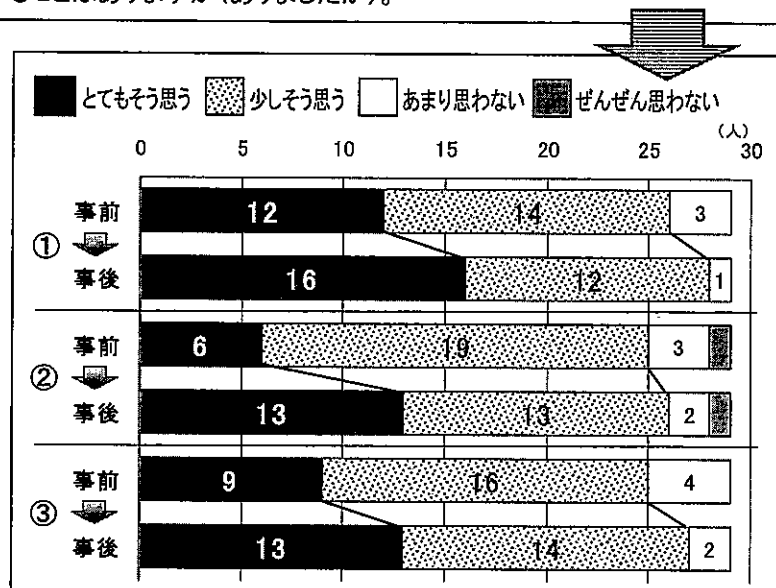
問①の結果から、検証授業の前後で、作品などを見ることへの関心や意欲が、わずかではあるが高まったと考えられる。

問②の結果から、検証授業の前後で、作品などを見て感じたことや考えたことを、文章で書いたり話したりして表現することが楽しいと感じるようになった児童が増えたことから、感じたことを言葉で表現することへの関心や意欲が高まったと言える。その一方で、書くこと・話すことが中心であった本時の活動内容では、文章を書くことに対して強い苦手意識をもつ児童の関心や意欲を十分に高められず、その結果、見ることへの関心や意欲も十分に高めることができなかつたと考えられる。

問③の結果から、友達との交流活動によって、ほとんどの児童が自分の見方や感じ方に変化を感じることができたと考えられる。

○ 「鑑賞の能力」の評価について

図画工作専科教員へのアンケート調査の結果で、「鑑賞の能力をどう評価するか」という問いに対して、表現活動・独立した鑑賞活動ともに回答数が多かったのが、「児童が記入するワークシートを活用している」という項目であった。また、「児童の活動の様子(表情や視線、話している内容)を見て評価している」、「児童の活動の様子(特筆すべきものについて)の記録をとって評価している」と回答する教員も多く、年間を通して様々な場面や方法で評価を行っていることが分かった。中には、活動の最後に鑑賞会を設定する、校内展示作品について手紙形式で感想を書かせる・独自の鑑賞カードを用意するなど、鑑賞の能力を評価するための具体的な手だてについての記述もあり、今後更に研究を深めるための参考にしたい。



2-D 「言語活動」の充実について

研究副主題

「言葉の力」を活用し児童の感じたことや考えたことを大切にした表現活動の工夫

(1) 研究副主題及び研究の視点

新しい学習指導要領では、児童に基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うため、言語活動を充実することとしている。

図画工作は、絵や立体で、自分の思いや考えを表現する教科であり、形や色などによる造形表現を好きだと感じている児童が多い。「特定の課題に関する調査」によると、「図画工作の教科が好きですか」という問いに「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した児童は 81.9%と、非常に多いことが確認された。

このような図画工作の表現においては、児童の創造性の育成の観点から、児童のつくりだす喜びを重視し、発想や構想の能力、創造的な技能を高めるために、形や色、材料の感じなどを生かして表現する学習を一層重視することが重要なことは言うまでもない。

しかしそれとともに、表現や鑑賞の活動において、形や色、材料の感じ、表し方の変化、表現の意図や特徴などを捉えながら、感じたことや思ったことを話したり、友人と話し合ったりするなどの学習活動の充実が求められている。

一方、図画工作専科教員を対象に実施したアンケート調査の結果から、「言語活動の充実」に向けて行っている取組については、「自分の思いや考えを、書いたり発表したりする」については 69.4%、「相互鑑賞を行い、友達の作品について感じたことなどを話し合う」については 68.8%と、比較的高い回答率であり、これらのことから、図画工作の授業において、「言葉の力」を活用した言語活動が既によく行われていることが分かる。

また、「児童の感じたことや考えたことを大切にした授業づくりにおいて課題があると感じたことのある点」について回答の内、「題材との出会わせ方の工夫が足りなかった」が 43.1%であったことから、題材の導入の設定の仕方に課題を感じている教員が多いことが分かる。

したがって、本研究においては、この言語活動における「言葉の力」に着目し、題材の導入において「言葉の力」を活用して効果的な活動の起点を作り出し、児童の造形的な思考力や判断力を発揮させるなど、「言葉の力」を意図的・積極的に活用する題材の設定を考えた。

具体的には、「言葉の力」を活用した教師の効果的な発問により児童の感性や思考力を発揮させるとともに、児童自身が「言葉の力」を発揮して「自分らしい考え方」を生み出させるという表現活動に取り組んだ。

(2) 研究の仮説

「言葉の力」を活用し、児童の感じたことや考えたことを大切にした表現活動の工夫を行えば、表現に関わる能力を効果的に育成できるであろう。

(3) 研究の方法

- 検証授業を行い、児童の活動の様子やワークシートの内容を分析し、手だての有効性を考察・検証する。

(4) 研究の内容

《検証授業》「3びきのねこちゃん」(第2学年、A表現(2)・B鑑賞(1)、全3時間)

平成23年12月8日実施

○ 題材の目標

ことばからイメージを広げ、面白い形を考えながら絵に表すことを楽しむ。

○ 研究副主題に迫るための具体的な手だて

① 「発想や構想の能力」を高めるための「言葉の力」の活用

①ーア 教師の「ことば」(条件文)の工夫

本題材は、言葉のイメージから3種類のねこをかく活動である。対象学年が2学年と低学年であることも考慮して、なるべく容易にイメージを広げられる言葉を設定した。

はじめの2匹は、教師が意味を与え、3匹目のねこの意味は児童自身が作り出すようにした。このような意味の連鎖が、児童の思考力を効果的に刺激すると考えたからである。

また、ねこに付与される意味については、「大きい」「黒い」などの、形や色に関わるものは避け、造形的なイメージを限定しないものとした。

1匹目…「強そうな」ねこちゃん

2匹目…「優しい」ねこちゃん

今回はこのように設定した。

①ーイ ワークシートの工夫

自分の思いや考え「自己の思考」の過程をまとめられるワークシートとして工夫した。

ワークシートには、「3びきのねこちゃん」と題材名を提示し、1枚の画用紙にこれから3匹のねこをかくのだということを意識させた。

ただし、()に何を書くかは分からないようになっている。

② 「鑑賞の能力」を高めるための「言葉の力」の活用

②「伝え合い」ができる場の設定の工夫

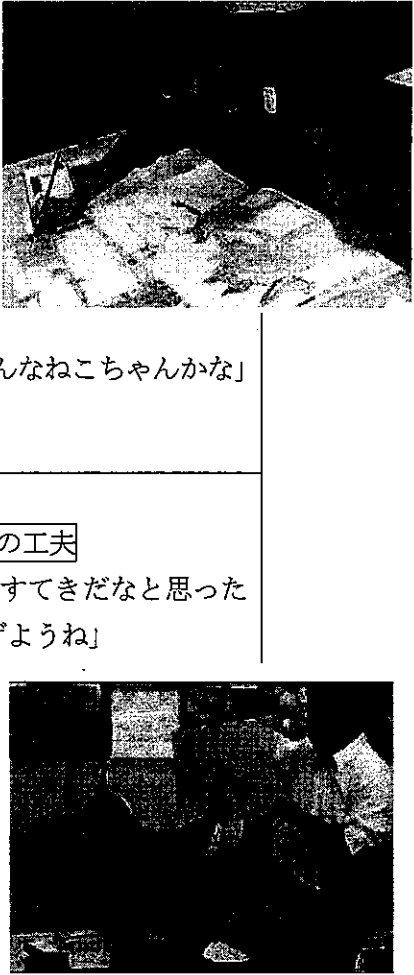
付箋を活用した鑑賞活動を設定して、自分の思いや考えを相手に伝えやすいようにした。2,5cm×7,5cmの付箋は、一言、書き記すことができる程度の大きさであるため、さほど負担なく、数多くの鑑賞が可能になる。また、その付箋を基にした発表会を、交流の場として設定した。

3びきのねこちゃん	
<u>2ねん くみ なまえ</u>	
① ()	ねこちゃん
② ()	ねこちゃん
③ ()	ねこちゃん
どんなえができましたか	


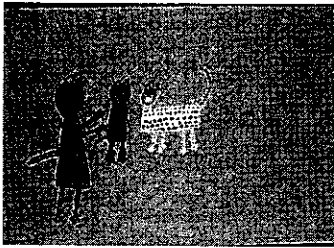

○ 題材の評価規準

	ア 造形への関心・意欲・態度	イ 発想や構想の能力	エ 鑑賞の能力
題材の評価規準	ことばから受けるイメージを基に、すすんで表現活動に取り組んでいる。	ことばから受けるイメージを基に、表し方を考えている。	自分や友達の子どもの作品のよさや面白さに気付いている。

○ 学習の展開と「言語活動」の充実を図るための手だて等

時間	学習活動	「言語活動」の充実を図るための手だて等	評価規準・方法
一次 90分	<p>1 ことばから受けるイメージをもとに、3匹のねこをかく。</p> <p>① 1匹目 強そうなねこをかく。</p> <p>② 2匹目 やさしいねこをかく。</p> <p>③ 3匹目 自分で自由に考えたねこをかく。 「□□なねこちゃん」と名前を付ける。</p> <p>④ 色を塗る。</p> <p>⑤ ワークシートにねこの物語を書く。</p>	<p>①-ア 教師の「ことば」(条件文)の工夫</p> <p>①-イ ワークシートの工夫</p> <p>○ワークシートに意味を書いてから絵をかく。 ○鉛筆でかく。</p> <p>○「1匹目は強そうなねこだよ」 「どんな大きさでもいいよ」 「どこにかいてもいいよ」 「どんなねこが強そうかな」 「どんな目をしてるかな」「どんな顔をしてるかな」</p> <p>○「2匹目は優しいねこだよ」</p> <p>○「3匹目は○○○…なねこだよ」 「どんなねこかは自分で考えてかくよ」</p> <p>○「ねこちゃんに色を塗るよ」 「周りも塗っていいよ」 「どんな色で塗ろうかな」</p> <p>○「自分のかいたねこちゃんはどうなねこちゃんかな」</p>	ア・イ・エ 観察・対話 ワークシート (特筆すべき状況は記録に残す。)
二次 45分	<p>⑥ 付箋に書いて伝え合う鑑賞活動をする。</p> <p>⑦ 発表会をする。</p>	<p>②「伝え合い」ができる場の設定の工夫</p> <p>○「お友達のかいたねこちゃんのすてきだなと思ったところを、お友達に伝えてあげようね」</p> <p>○「お友達のかいたねこちゃんのすてきだなと思ったところを、みんなに紹介しようね」</p>	

(5) 研究の成果
 [具体的な事例]

	児童A	児童B	児童C
			
条件文③ 「□□な ねこちゃ ん」	あたたかいおかあさんの ねこちゃん (位置: <u>左</u>)	ぴかぴかの ねこちゃん (位置: <u>右</u>)	おこらない ねこちゃん (位置: <u>左</u>)
説明	3匹は親子です。 ①はお父さん(位置: <u>上</u>) ③はお母さん(位置: <u>左</u>) ②はその子供です。(位 置: <u>右</u>) 3匹は仲良し家族です。	①(位置: <u>左</u>)と ②(位置: <u>中</u>) が結婚して ③(位置: <u>右</u>)のねこち ゃんが生まれました。 かわいがられて、いつもび かぴかに拭いてもらって います。	①(位置: <u>右下</u>) ②(位置: <u>右上</u>) ③(位置: <u>左</u>) の3匹はそれぞれ違う世 界にいます。③のねこち ゃんは、引っかかれても決し て怒りません。やさしいね こちゃんです。
友達から の付箋鑑 賞	「えのまわりの色がきれい だね。」 「お父さん、りっぱだね！」	「ぴかぴかでかわいいね。」 「けっこんして生まれたと ころが、おもしろいね。」	「せんをひいたところがお もしろい。」 「下のねこのポーズがいい ね！」
作者の児 童の感想	かぞくのことをイメージ してかきました。こくごの じかんとはちがって、もの がたりをつくるのがとても たのしかったです。ともだ ちにわかってもらって、と てもうれしかったです。	ぶんをかくのとおなじか んじでえをかくのもたのし かったです。	ひとつずつばらばらにか きました。ともだちのはな しをきいて、さんびきがな かがいいなど、おもいまし た。
考 察	上→右→左 ③まで進んだところでスト ーリーが思い付いた様子で す。	左→中→右 ①から順番に、派生してイ メージが広がっています。	右下→右上→左 それぞれ、個別にイメージ しています。線で区切られ ています。

①ーア 教師の「ことば」(条件文)の工夫

①ーイ ワークシートの工夫について

条件文を提示することにより、児童が自分の考えや自分なりに表したいイメージをもつことができたり、自分のアイデアを深めようとしたりする児童の姿を見ることができた。

「〇〇なねこ」と言う条件文③では、「しっかりした」「かわいい」など、条件文①「強そうな」、条件文②「優しい」の意味に近い発想のものも見られたが、そのねこの特徴を、「おこりんぼう」「ぴかぴかの」「色あざやか」「美しい」などと意味付けるなど、更に発想が広がったものもあった。

また、「かぜをひきそうな」「おかあさんみたいな」「かめとなかよしな」など、自分の生活体験と重ねていると思われるものも見られた。

このような、児童が言葉から受けた印象からイメージを広げていく児童の思考のプロセスを踏まえることで、より、児童の感じたことや考えたことを知ることができ、児童自身も、自分の思いや考えについて知ることができていた。

その結果、自分の思いや考えを「自己の思考」として意識しながら活動を進めることができ、自分の作品の表現を追求する際にも効果的であった。

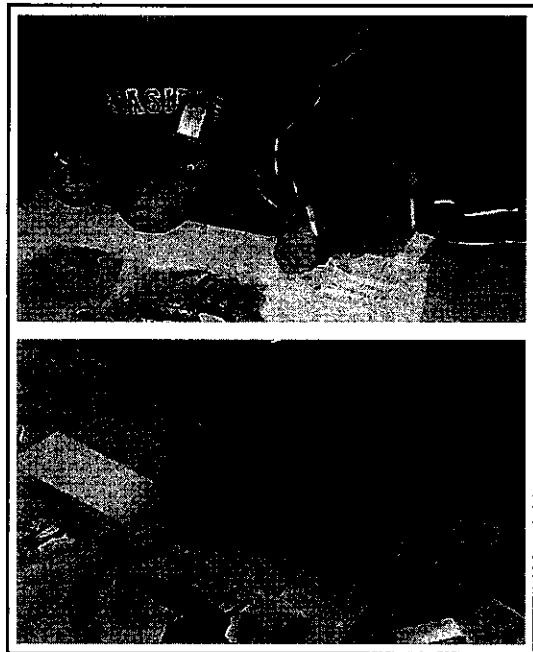
教師としては、児童の思いや考えを、ワークシートと作品を併せて見ることで、児童が本来、表現したいものを理解しながら指導することができた。

②「伝え合い」ができる場の設定の工夫について

付箋を活用した鑑賞活動では、児童が楽しみながら、数多くの作品について、短時間で感想等を書くことができた。また、児童は、他の児童の書いたことを読みながら自分の考えを深めることもできたことから、相互鑑賞活動として効果的であったと考える。

なお、各作品の付箋の多少の差については、配慮しながら実施した。

友達のかいた作品のすてきだと思ったところを発表して友達に伝える活動についても、児童たちは楽しみながら生き生きと活動していた。話す、聞くという立場を通しての、「言葉の力」を活用した豊かな学び合いを通して、互いの作品の表現の違いについて実感を深めていた。



(6) 今後の課題

本題材のような言語活動に重点を置いた、表現や鑑賞の活動に取り組んで実感したことは、教師自身が児童より一層、言語に対する意識や関心をもつことの重要性である。

具体的には、児童に投げかける用語が、その意味や児童の発達の段階などに照らして、的確であるかどうか、また、児童の使用する言葉について、児童が言葉の役割や機能などについて意識や関心をもって正しい国語を用いるよう指導することができているかどうかなどについてである。

児童の言語環境を整えずして、児童の言語活動の充実や、児童の言語能力の育成は図れない。

この点で、一層、努力していくことが課題である。

平成23年度 教育研究員名簿

小学校・図画工作

地区	学校名	職名	氏名
板橋区	板橋区立前野小学校	主任教諭	○ 及川 郁美
足立区	足立区立西伊興小学校	教諭	三宅 慶進
江戸川区	江戸川区立第三松江小学校	主任教諭	◎ 中村 和哉
三鷹市	三鷹市立中原小学校	主任教諭	宮當 恭子

◎ 世話人 ○ 副世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課

統括指導主事 岩崎 治彦

平成 23 年度
教育研究員研究報告書

小学校 図画工作

東京都教育委員会印刷物登録

平成 23 年度第 181 号

平成 24 年 3 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課

所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号

電話番号 (03) 5320-6836

印刷会社 有限会社 シーダー企画